

ゴットフレッドソンの制限・妥協・ 自己創造理論

Gottfredson's Theory of Circumscription, Compromise, and
Self-Creation (Linda S. Gottfredson pp.85-148 より)

南九州大学
吉中 淳

問題の所在

個人は自己知覚に基づいて己が社会において占める場所(ニッチ)を追求する。

職業(occupation)は最も重要なものの一つ。

現代社会は自由であるにもかかわらず
社会的不平等はなぜ再生産されるのか
(階層間の流動性はなぜ低いのか)

- 外的要因 ...生まれた環境によって
選べる選択肢に制限がある
- 内的要因 ...選べる選択肢があるのにも
関わらず、「自主規制」をして
しまう。
 1. 職業認知の偏り(制限と妥協)
 2. 自己概念の誤り

1. 職業認知について

- 「職業志望」という「点」を調べてもしょうがない
(聞かたびに違うことを答えるかもしれないから)
- それよりも、「受け入れ可能な職業選択肢の領域」
という「面」を調べる方が生産的
- 職業認知の発達とは、個人の生きている「社会的空間」の中から「受け入れ可能な職業選択肢の領域」を狭めていくプロセス(制限過程)でもある。

職業認知の発達段階

- ほぼ全員が共通の段階を経て発達する

- (1) 大きいもの、強いものにあこがれる段階(3～5歳)
- (2) **性別**によって区分する段階(6～8歳)
- (3) **職業威信度**によって区分する段階(9～13歳)
- (4) ユニークな自己を追求する段階(14歳以降)

制限過程の特徴

- 一度排除された選択肢は復活しない
- 青年期に「自己」を追求する時期には多くの選択肢がすでに排除済み
- 排除された選択肢は視野に入ることすらなくなる

妥協

ここでは、青年期から成人期に移行する際に、
自分の望む選択肢が**実現不可能**であるとわかった
(または誤解した)時、**望む選択肢を放棄**し、**実**
現可能な選択肢の方をとることを指す
(居場所作り...公的自己の形成が最も重要だから)

「職業興味」が最も容易に犠牲にされる。
(ついで「職業威信度」「性別」の順)

その人にとっての「**受容可能領域**」の外側から選
ぶとなると妥協は苦痛となり、大混乱に陥る

「**受容可能領域**」の認知の適切さが問題となる。

2. 自己概念について

個人は自己知覚に基づいて己が社会において占
める場所(ニッチ)を追求する

- 自己知覚が間違っていたら、進んだ先で不
適合に陥る(matchingの失敗)
- 正しい自己知覚があるのか。
- 「本当の自分」...キャリア心理学の暗黙の
前提になっている

遺伝環境論争

- 素朴な遺伝論

遺伝子で規定されているものが自然に現れるだけ
(周りからの援助の余地を否定)

- 素朴な環境論

親・教師・政治家ら外部によって好きなように形成されるだけ(「本当の自分」なんてない) 職業興味ですら周囲によってそれに興味を持つように仕向けられたに過ぎない。

最近まで主流の「社会化理論」

- 遺伝の影響はあるが、年齢とともに**減衰**するとする。(「遺伝も環境も」といいつつ、この理論では「遺伝が大事」というのはリップサービスに過ぎなかった)

事実上の環境論...「本当の自分」を否定する立場

「本当の自分」を仮定するキャリア心理学とは本来、相容れないはず

社会化理論への反証

別々に暮らした一卵性双生児の研究
年齢とともに遺伝の影響はむしろ強まる
例 知能の遺伝継承性 (Plomin et.al, 2001)
幼児期 20% 児童期 40% 青年期 60%
成人期後期 80%
学業成績、言語・空間的能力、反社会性
パーソナリティにも同様の傾向がある
逆に、環境を共有したことで類似性が高まる
という証拠はない

遺伝－環境パートナーシップ理論

(Bouchard, Lykken, Tellegen &
McGue, 1996; Eysenck, 1998)

- 遺伝の影響には二種類の経路がある。

直接的(受動的)

遺伝子 (生物学的) 自己形成

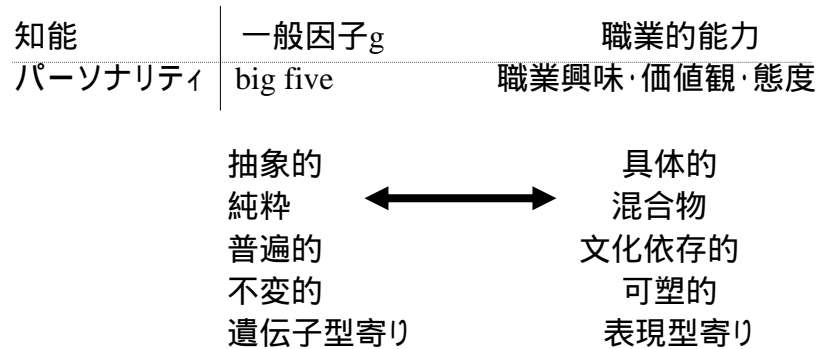
間接的(作用 - 反作用的)

遺伝子 自己形成 環境形成 自己形成

環境が遺伝子と独立に存在することはありません。
環境もまた遺伝子の結果である

自己の階層構造

遺伝子の影響は100%現れるわけではない。
(遺伝子型と表現型に分けて考える)



本当の自分とは

- 遺伝子型と矛盾しないような自分

自分の意識できる自分だけが自分のすべてではない(フロイト以来の常識)

「本当の自分」は、前意識的働きかけをたえず「意識」にむけて働きかけているはず。

それに耳を傾けることが重要

望ましい人間像

- × 特定職業に対する能力・適性
- × 一般的な能力、パーソナリティ

キャリア探索能力

ただし、関係あり
パーソナリティのBig fiveの一つ「経験に対するオープンさ」
はキャリア探索能力と関係あり。
この特性にかかわらず、キャリア探索能力を高めることが
求められる。

目標:建設的現実主義者

キャリアカウンセリングは 「自己洞察の助産婦」たるべし

- 遺伝子型(一般能力)を変えることはできない。表現型を調整できるのみ(抑制、回避...)
- 遺伝子型は直接知ることはいできない。表現型を通して試行錯誤的に知ることができるのみ。
- 本人だけが「内なる声」を聞くことができる
- カウンセラーは試行錯誤を効率的に行うためのアドバイスをする。